

と、何とさの首は白いうさぎでした。びよんと、下にとびおりて、うさぎはきまろつと赤い目で二人を見て、口をひらきました。

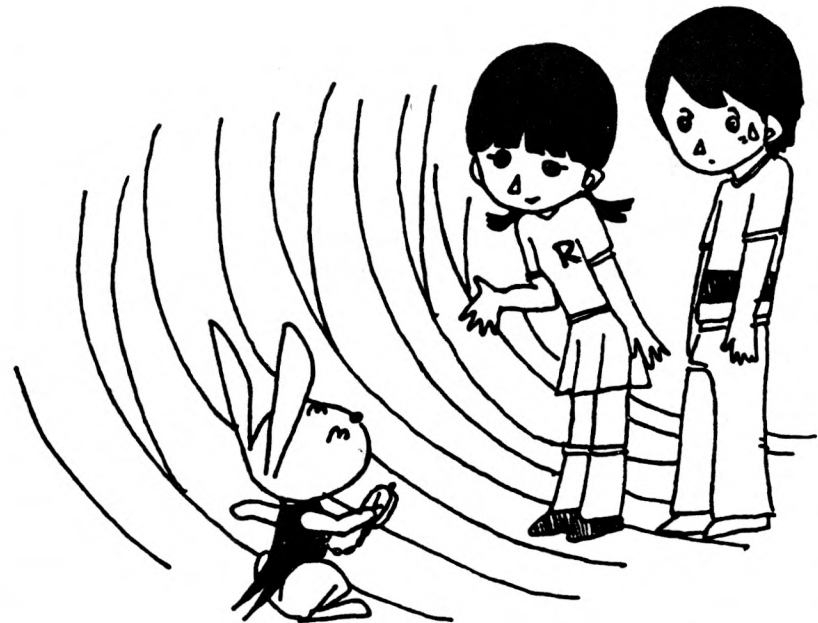
「見えるようになったかい。おばかさん。君達は、僕らの天井を歩いてきたんだよ。」

ゆうは、うさぎがさういうのを不思議そうに見ていました。だって、今まで、口をモソモソ動かしてにじんやらキヤベリやらをたべている少し鈍そうなうさぎしかみたことがなかったのですから、人の言葉をしゃべるうさぎがいるなんて……

りようこちやんは、別に不思議さうな顔もせず、まるでうさぎはもともとしやべるものでもあったように、

「こんにちは、あなたは何ていう名前なの？ 私はりようこちというのだけと……あ、こっちはね、ポイフレンドのゆうくんというの。」

なんて、おいさつをはじめるのでした。



た。ゆうは、ポイフレンドなんて言われて、そのこまひっくり返って驚いていたのをした。

うさぎはにやつと笑って、

「ついでくるかい？」

とききました。りようこちやんは、

「うん、どこにゆくのか？」

とききました。うさぎときたり、何もいわずに懐中時計をとりだしてみせました。りようこちやんは、わかたふうにうなずき、スタスタと今まで天井だった穴の上の方を歩いてゆきます。

ゆうは、おいてかいてしまうのに気がついて、大あわてでついでにこうとしました。けれども、そっちは天井なのですから、どうやっていのかわかりません。

「りようこちやああん、まってよま。と、恥しさも忘れて大きな声でよびました。

りようこちやんは、

「あらあら。」

と、うさぎはうらやまにふりむいて、

「ちよつとジヤンプしてごらんないや。こっちはこゆるめ、ゆうくん。」

と、うさぎはうらやまにふりむいて、

「あらあら、しりもちをついてしまいました。」

全く女の子はこゆたから……と思いなからもゆうはとびあがると、

「あつ。」

と、うさぎはうらやまにふりむいて、

「あらあら、しりもちをついてしまいました。」

たつて、世界がぐるぐるとまわったと思うと何と足の下にはもう岩のすべすべした床ではなく、びっしりと二けたのはえたじゆうたんのようなお上にいたので……

「うふっ、さあ、いこう。」

りようこちやんは、横に立って、笑っていきます。

「ねえ、こはどこで、このうさぐさいうさぎはいつたい……。」

「大忙しでさききました。」

「しいっ、あとで……。」

と横目でうさぎを見て、ゆうの手をひっぱって起すともうすたすたと歩いていきます。

さつきと立場が逆になっちゃったなあ、でもぼくは別に憶病なんかじゃありません。思いながらゆうはついてゆきます。

「うん、ぼくはちっとも憶病なんかじゃないんだ」と考えつつげているうちに、パアッ、と前の方があかるくなりまし。

オレンジ色というよりは金色っぽく光がさしてきたのです。

「うわあ、きれい！」

と、走っていったりようこちゃんの前の方でさけびました。ゆうも大急ぎで穴の外にとびだすと、そこは一面にコリブキンエノコロが風に穂をさよがせている草原でした。あのうさぎはどこへいったんだろう、とゆうはますます思いました。すると遠くの方で、まるで彼が立つようにざわざわとえのころぐさがゆれ、ピ

ョンと魚のようになうさぎがとびあかりアカンベエをしました。あのうさぎには、それでも、もう十分と思える程うさぎが遠くにいったころ、ゆうは、さつき穴の中できこうとしていたことを思いだして、えのころぐさの中にここにこして、いるりようこちゃんにききました。

「ねえ、あのうさぎはきみの知りあひかい？」

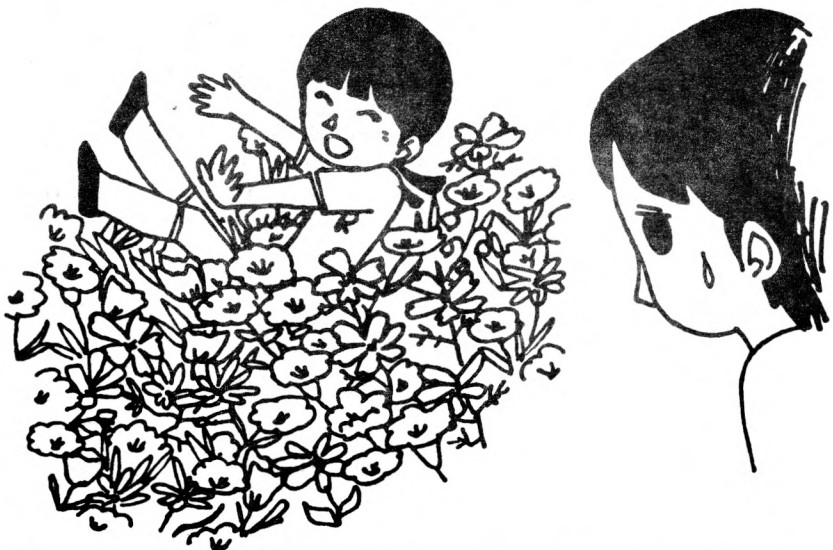
「ここはどこ？」

「きみは不思議じゃないのかい？」

すると

「この間ね、読んだ本にアリスのうさぎがでていたの、それはやつぱり穴の中に走り込んでいったし、ことばもしやべったわよ、あの懐中時計みたとき私すぐわかつたんだもの、だからね、ここはきつと不思議の国よ。」

とえらそうにいいました。それをきいたゆうは、すぐくへんに思っ、「お話の中のことは本とうじやない



「うん、さつきはちっとも憶病なんかじゃないんだ」と考えつつげているうちに、パアッ、と前の方があかるくなりまし。

「うわあ、きれい！」

と、走っていったりようこちゃんの前の方でさけびました。ゆうも大急ぎで穴の外にとびだすと、そこは一面にコリブキンエノコロが風に穂をさよがせている草原でした。あのうさぎはどこへいったんだろう、とゆうはますます思いました。すると遠くの方で、まるで彼が立つようにざわざわとえのころぐさがゆれ、ピ

「うん、さつきはちっとも憶病なんかじゃないんだ」と考えつつげているうちに、パアッ、と前の方があかるくなりまし。

「うわあ、きれい！」

と、走っていったりようこちゃんの前の方でさけびました。ゆうも大急ぎで穴の外にとびだすと、そこは一面にコリブキンエノコロが風に穂をさよがせている草原でした。あのうさぎはどこへいったんだろう、とゆうはますます思いました。すると遠くの方で、まるで彼が立つようにざわざわとえのころぐさがゆれ、ピ

な葉っぱの山の中から顔を出して、
「おい、その子供、ひまなら手伝
え。」
とどなりました。

「うわっ。」
と、思わず声をあげてから、ゆうは
はずかしくつて、りょうこちゃん
今の声をきかないでくるといいん
だけと……ときまろきまるとみまわ
してみました。

まっ青な空にうろこ雲がうかんで
いる下に風にそよぐ金色の穂をつけ
た原っぱが広がり、ずっと遠くの方
には、ゆきみたいたとゆうがさいし
よ思っ、た白いものがみえています。
そして、その草原のあちこちには、
まるで燃えあがるような赤さの葉っ
ぱの山と、黄色くさまった松葉の山
が点々とみえていました。
りょうこちゃんはどこにいったの
か姿もみえませんが、どうやら今の
悲鳴はきかぬかかったようです。
ぼつとして、どなった男の子の方を

何してるの。」
と、りょうこちゃんは矢つきばやに
言いました。

ゆうが答えるよりも先に葉っぱの
山を押のけて、がさがさと出て来た
男の子をみると、頭でっかちで、ゆ
うよりもずつと小さいことかわかり
ました。

「ぼくは、しゅういち、葉っぱぬり
のしごとをしています。」
と急にマいねいな言葉で、
「ところでふしぎの国ってなに？」
と、りょうこちゃんにききかえしま
した。

「こには不思議の国でしょう？
私達、うさぎのあとについて入って
きたのよ、土手においてた穴から。」
我慢そうたらリスの話をするのを
きき終えて、しゅういちが笑い出し
ました。

「そうか、きつとあのバカのリード
が手が足りないもんで呼んできたな
あはは、そうすると、おまえら仕事

向きなおると、
「君、だれだい、そこで何をしてい
るの、何を手伝えつてゆうんだ？」
と、少しムツとしてききかえしまし
た。

「なんだ、子供、おまえ仕事に来た
んじゃないのか？」
と、その男の子はさも不思議だとい
いたげにききかえします。

ゆうは、また「子供」なんて、同
じ位の男の子にいわれたのですから
頭にきてしまつて、
「ちかうさ、ここはいったいとこな
んだい、ぼくだって忙がしいんだ
はやくかえつて畑の草とりをしなけ
りやならないんだぞ。」

と、えらそうにいいました。
その
こえをききつけて、両手にいっぱい
草やら木の奥やらかかえたりようこ
ちゃんもとんできました。

「あら、この子だれだい？　そうそ
う、私はりょうこです、このこはと
もだちのゆうくん、ふしぎの国で、





するんだ。おっと、ここは不思議の園なんかであるもんか、残念だったな、ここはまあ、なんというか、次の季節を溜めとく空間なんだよ。そうきいて、ゆうも、りやうこちヤンもびつくりしてしまいました。季節は、奥はこんな所でつくられていたのでした。今は夏だから、今度のきせつは秋です。それで、しゅういちはいっしょうけんめい葉っぱの色塗りをしていたのでした。「今年、冷たい風を作っている、向うの山でちよつとした事故があった。それで少しだけ冷たい風が漏れたんだな、秋の来るのがやたらに早いらしい。」というわけだ、ゆうとりやうこちヤンはりんじやといの仕事にかり出されたというわけでした。さつきゆうが遠くに見た白い山はやはり雪や氷やうでまきているようでした。それは、このせかいの

端に、もう冬が用意されていっているのじょう。こつぶきんえのころはぬり終ったし、あきぐみも奥をつけた、くりのいかにかはたい人だけと、いま、しゅうじが用意をしていり、あとは、こすもすと葉っぱ塗りがたくさん。」と、しゅういちが命令しようとしています。「ちよつとまって、ぼくたち帰らなキヤ、はくさいの草とりをするんだ。」ゆうは、しっかりと所を見せよと、しゅういちのしやべるのをさえきっていいました。けれども、「ああ、そう、でも、仕事すればいいぞ、そんなこと、すぐやってやる、できないんだ、おれには。」と答えて、さあ、とばかりに大きなはけみたいなぶでと、えのぐのかん—「カロチン」とか「キサントフィル」とかかいてあるかん—をおしつけてしまいました。

りやうこちヤンは、すっかりよろこんで、ちよくらいのかんをまわりにおき、コスモスを塗りはじめていきます。ゆうは、「全く、女の子っていうのは仕事なんですぐめすれちやうんだから。」などと、しゅういちのえらそうなのや、はくさいの草をとってしまいう能力なんかにちやうちできないうしさを、楽しそうにしているりやうこちヤンに向けまぶつぷつと言っていました。しばらくして、夢中で色ぬりをしていたりやうこちヤンが急にピョンと首をあげ、同じように一生けんめいぶぶを動かしているしゅういちに向って、「ぬえ、リービつ、まうさぎ、なんなの？」とききました。「ああ、あれはなんだか古い昔からいるうさぎで、その祖先は、あんなの言った話に出てくるうさぎによく似たじいさまだったそうだが、確か

かたみのチョッキと懐中時計とけいとズボンなんかのうちの時計をもちつたというはなしをしていた。今は、特に仕事もしてない、それで、人手不足のときはひまそうな子供を連れまきてくれる。」

と答えました。

ゆうは、それをきいて、何か何だかわからない。確かにこれは「ほんとのこと」だけ、「もの」がたり「が」ゴツ「ちや」ませに入「つ」まきてる「み」たいだと思「い」、もう考えるのをやめてしま「い」ました。

りよう「ちや」んとききたら、まるで朝「にな」つたらお日「さま」が出る「のが」当然「とい」つた顔「で」、

「ヤッぱりさうね、あのうさぎはリスのうさぎのしそんなんだね、ヤッぱりね、ぬ、ゆうくん。」

なんて「い」うのです。そして、すべ「て」め「か」つたよう「な」ふう「で」、一生けん「めい」、また色をぬり「つ」づけました。

ゆうのおなかがグウ「ー」となりまし

から急ぐゆうについで来ました。

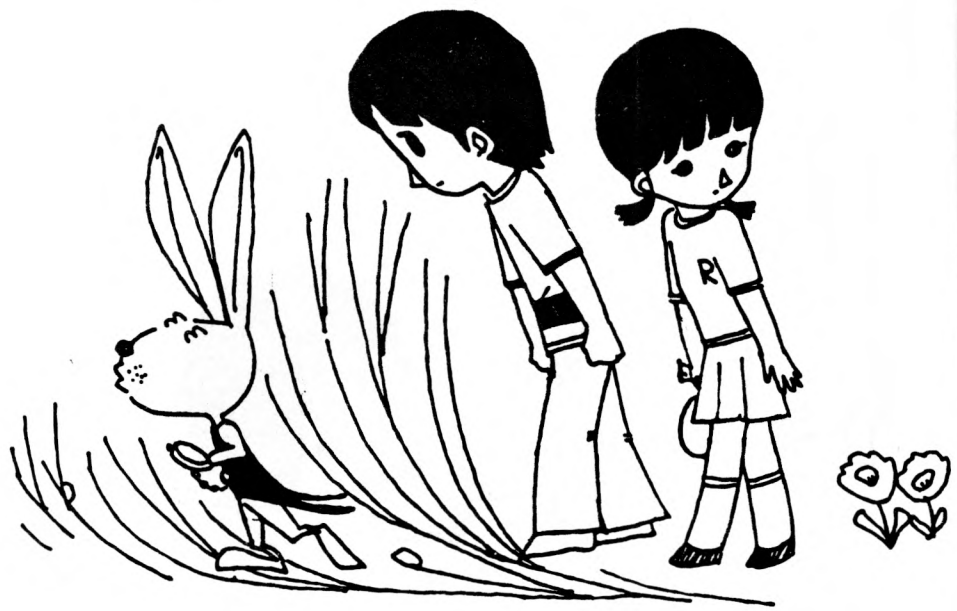
ゆうは、それと「ころ」ではありませ「ん」。もし、ここで、畑の草がボウ「ボウ」とはえ放題「だ」つたらどうしよう「な」ん「て」思「つ」つて、半分「か」け足「す」。

「ま「つ」つて、ま「つ」つてよ、ゆうくん、秋の準備「を」して「い」る「こ」こは「す」ごく「き」い「ね」え。春の用意「の」時「も」、また手「伝」いに「来」たい「わ」。

なんて、キラキラ「と」した「目」で「原」つ「ば」を「み」な「が」ら、りよう「ちや」んは「り」つ「ま」います。

そして、ゆう「た」ちは「元」の「土」手「の」所「へ」さ「か」さま「に」出「現」し「て」少「し」つ「い」ら「く」し「た」だ「け」で、ぶ「じ」にお「昼」の「こ」はん「に」も「ま」にあ「つ」た「し」、甘「い」あ「け」ひ「が」お「か」あ「さん」を「お」ど「ろ」か「せ」た「し」、畑「の」雑「草」は「お」と「う」さん「が」び「つ」くり「す」る「程」き「い」にな「つ」て「い」まし「た」が、りよう「ちや」ん「は」あ「れ」以「来」、ゆう「の」う「ち」に「く」る「と」土「手」に「か」じ「り」つ「い」て「穴」を「さ」が「す」の「が」日「課」に「な」り「ま」し「た」。

ゆうは、い「ま」だ「に」信「じ」う「れ」す「に」。



た。もうじきお昼なのでしよう。すっ「か」り遅「く」な「つ」た「こ」ろ「が」や「つ」と「わ」かり、は「つ」として、

「もう帰るんだ。」

と、ゆうは立ちあ「が」りました。

「ゆう「の」ま「わ」り「に」も、大分赤「い」は「つ」ば「が」山「に」な「つ」て「い」ます。し「ゆ」う「い」ち「は」「だ」め」とい「う」だ「らう」か「と」心「配」で「し」た「が」、さ「う」は「い」ぬ「す」、

「い「や」、だ「い」ぬ「は」か「と」つ「た」ぞ、あ「り」が「と」う。」

と「い」つ「つ」て「か」ら、り「い」び、り「い」び「と」い「つ」つ「て」、う「さ」ぎを「呼」び「ま」し「た」。す「べ」マ「承」知「し」た「と」い「う」よ「う」に、う「さ」ぎ「は」甘「い」あ「け」び「の」奥「を」た「く」さん「り」よ「う」こ「ちや」ん「に」渡「し」、も「う」ピ「ョン」ピ「ョン」と「原」つ「ば」の「方」へ「と」び「は」じ「め」ま「し」た。

し「ゆ」う「い」ち「は」、

「じ「や」あ「な」。」

と「い」う「と」、また、燃「え」た「つ」よ「う」な「葉」つ「ば」の「山」の「中」に「ス」ッ「ポ」リ「と」も「ぐ」つ「て」し「ま」い、り「よ」う「ちや」ん「は」名「ご」り「お」し「さ」う「に」ふ「り」か「え」り「ふ」り「か」え「り」み「お

著書略歴

昭和31年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日
昭和54年8月21日



「Time is execution ground」
「永遠にわたる一つの世界」
「分野にわたる活躍中」
「武井武雄，萩原朔太郎」

魚が泳ぐ地球儀

昭和54年3月31日 発行

著者 いとゆりあ
発行所 于ロックス童話工房

〒14 神奈川県川崎市多摩区生田2016

菅野荘 柴田方

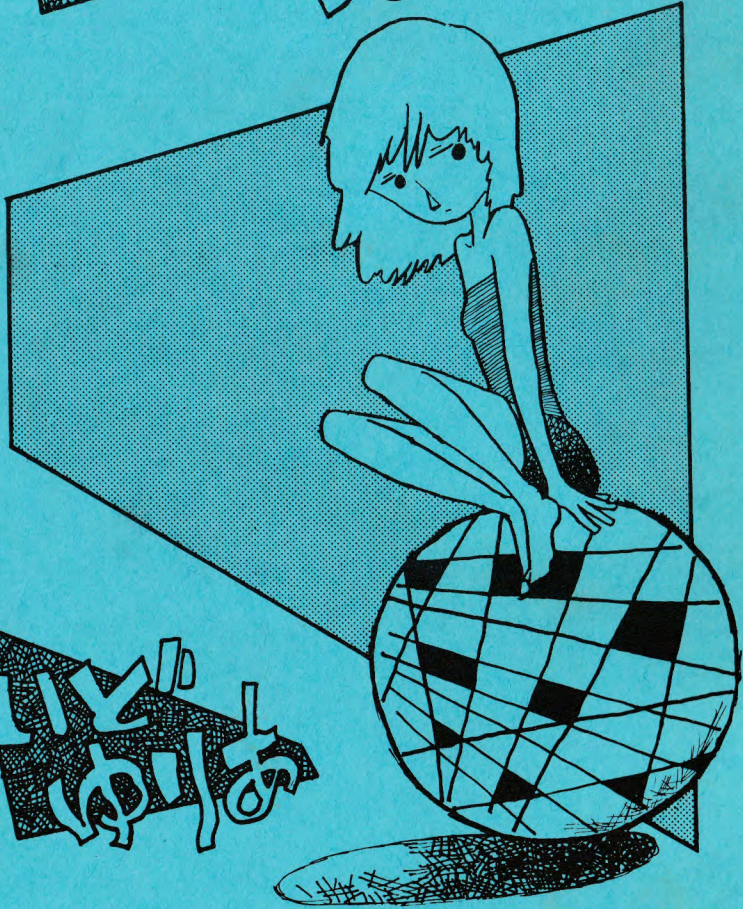
発行人 わらへあきひと
協カ 銀河出版

さし絵 岬とおる

原稿なきん

絵麻，千原俊，
わらへあきひと

色ガラスの地球儀



いと
ゆりあ

** 色ガラスの地球儀 **



** いと
ゆりあ **